

発明家・堀井新治郎親子の功績を後世に

発祥の地で温かみを伝える

琵琶湖の南東、滋賀県東近江市にある「ガリ版伝承館」。

謄写版を発明した堀井新治郎親子の偉大な功績をいまに伝えようと、生家を改装して資料の展示やガリ版体験を行なっている。

管理・運営に当たるNPOガリ版芸術村代表の岡田文伸さんに聞いた。

NPO ガリ版芸術村代表

岡田文伸

●おかだ・ふみのぶ 1956年生まれ。NPOガリ版芸術村代表。新ガリ版ネットワーク副会長。滋賀県の「ガリ版伝承館」にてガリ版文化の啓蒙・普及活動を行なっている。納豆工房「岡本宿」代表も務める。

きっかけは「ミメオグラフ」

——いまなお全国に愛好家がいるガリ版。その発祥の地が東近江市とは知りませんでした。

ガリ版こと謄写版を明治二十七年（二八九四）年に発明したのが、このガリ版伝承館の建物に住んでいた堀井新治郎親子です。父・元紀（初代

新治郎）は農商務省の巡回教師として県内各地で茶の栽培や製茶の指導、製茶審査員を務めるなど、官吏の道歩んでいました。一方、子・仁紀（二代目新治郎）も商社に勤務していたことから、ともに国内・海外市場への関心は高かったそうです。

当時の日本には印刷機も輸入され、使用されていましたが、膨大な資本と特別な施設が必要でした。元紀は

巡回教師として多くの資料を使っていたため、簡易印刷機の必要性を感じていたんですね。結局、官吏の職を辞し、同時期に商社を退社した仁紀とともに、簡易印刷機の開発に取り組むことになるのです。

——謄写版はどのようにして発明されたのでしょうか。

謄写版との出会いは明治二十六年。元紀がシカゴ万国博覧会を訪れたと

き、エジソンの発明し

た「ミメオグラフ」に触れたことがきっかけでした。しかしミメオグラフは、ペン先を細かく振動させる電気ペンで孔を開けていくもので、ローマ字を書くにはよくても、漢字を書くには適していません

ったんですね。

そこで日本の字に合った謄写版として翌二十七年一月に発売したのが「堀井謄写版一号機」でした。和紙にパラフィン等を塗った「ろう（蠟）原紙」を「ヤスリ」の上に乗せ、先端が鉄でできた「鉄筆」で文字や絵を描いていく——版画ほど難しくなく、印刷機ほど費用も場所も必要ない。画期的な印刷技術ですね。



明治27年に発売された「堀井謄写版一号機」



明治26年、元紀がシカゴ万国博覧会のために渡米した際に入手したエジソンの「ミメオグラフ」